

## 【ギリシア語】

### カタカナ語の源泉としての古典ギリシア語

ホメロスの叙事詩やギリシア悲劇、あるいはプラトン、アリストテレスの哲学的著作から新約聖書まで、およそ西洋の文化的伝統に何らかの関心を寄せる者にとって、そして大学という知的空間でそれらの書物に多少とも学問的な関わりを持ちたいという志を抱く者にとって、古典ギリシア語を学ぶ意義がどれほど大きなものか、これはあえて強調するまでもないところだろう。こうした大上段の解説は、しかしまた別の機会に譲るとして、ここでは、今から二千年以上も前に用いられていた死語が、現代の日本語環境に暮らすわれわれにとっても意外なほど身近な存在となっていることを、少しばかりお話することにした。

たとえば、社会科学系の学問を中心に据えるこの大学においてキーワードとなるはずの、ポリティクス (politics)、エコノミクス (economics) あるいはヒストリー (history)、そしてフィロソフィー (philosophy) にデモクラシー (democracy)、あるいはサイコロジー (psychology) からカテゴリー (category) まで、これらの単語はいずれも、日本語に直すまでもなく、すでにカタカナ語として十分に流通しているといつてよい。というより、アイデア (idea) やシンポジウム (symposium)、あるいはエコロジー (ecology) のように、もはや対応する訳語を探すほうが困難な場合も少なからずあるが、ところでこれらはいったい、何語と呼ぶのが妥当であろうか。それはもちろん、英語でしょ、という答えが返ってくる。ある意味では、まったくそのとおりである。けれども、少しでもそのエティモロジー (etymology) つまり「語源」を探してみれば、これらの言葉がいずれも、古代のギリシア語に由来するという事実に行きあたるはずである。

たとえば「経済」を意味する economy を例にとってみよう。これはギリシア語の oikos「家」と nomos「法」とで成り立っている単語であり、じっさい古代において oiko-nomia は「家」を成り立たせる「法」、つまり「家政」の意味で用いられていた。これが古代ローマ語、すなわちラテン語に取り入れられた時点で oiko のスペルが oeco さらには eco に、また nomia についてはフランス語の nomie を経由して英語では nomy に、それぞれ変化していくのである。たったこの一例を知るだけでも、そこから、eco- で始まる単語が何らか「家」に関係し、あるいは -nomy の付く語が基本的には「法」ないしは「秩序」の意味を帯びるはずだ、という見通しを得ることができる。

デモクラシーならどうか。demo-kratia は demos「民衆」と kratos「権力」からなる語で、これは古代にあっても「民主制」を意味した。これが aristos「最も優れた者」が権力を握る体制なら aristo-kratia (> aristocracy) つまり「貴族制」、monos「単独者」による arche「支配」なら mon-archia (> monarchy) つまり「独裁制」といった具合である。ついでに monos が「単

独」を意味することから、およそ mono- ではじまる単語の意味が推測できる（モノラル、モノトーンなど）。あるいは、英語の -logy という語尾が logos（ロゴス）すなわち「言葉」ないしは「理法」に由来することを押さえれば、さまざまな知的営みが -logy の形をとっているのもうなずける。「魂」を意味する psyche（プシュケー、英語読みならサイケ）の様態を扱う psycho-logy や、地球環境をひとつの「家」として捉える eco-logy など、これらは古代には用例のない、近代の造語である。

造語ということ言えば、自然科学、とくに医学の分野におけるテクニカル・ターム（technical term）は一ちなみにテクノないしはテクニクも、ギリシア語の techne すなわち「技術」に由来するが一、その大半がギリシア語の組み合わせで出来ているといっても過言ではない。たとえば、つい最近のノーベル生理学賞で話題となったオート・ファジーなどという言葉についても、およそ auto- で始まる単語がギリシア語の autos「自身」に由来し、また phag というスペルが「食べる」を意味することを知っていれば、単なる音の羅列も、格段に身近な意味を帯びて聞こえてくるに違いない。

こんな具合に挙げていくなれば、英語にかぎらず、フランス語にせよドイツ語にせよ、およそ西洋近代語における抽象度の高い語彙の過半が、じつはギリシア語およびラテン語に由来する要素で出来上がっていることが判るはずである。伝統的に受け継がれてきた哲学的概念は言うにおよばず、これまでに存在しなかった現象ないしは営みを言い表すための、じつはいちばん使える素材として、二千年前の死語が活用されているわけである。

これをあえて東アジアの事情に比すならば、同じく二千年を超える伝統を誇る古代中国の文字、すなわち「漢字」によって、現代の日本語がどれだけの恩恵をこうむっているかを思い起こしてみればよい。一定水準の日本語を用いるうえで、個々の漢字のもつ基本的な意味を押さえることは、それこそ必須の手続きといえるだろう。英語とギリシア語・ラテン語との関係も、つまりは同じようなものである。この際、「教養として大切である」などといった抽象的な話はやめにしよう。端的に言って、大学教育において用いられるレベルの英語を、古典語の知識をまったく持たずに扱うことは、じつは、きわめて効率が悪いというほかないのである。

もう少し哲学的な説明を加えてみてもよい。すでに挙げた「語源」を意味するエティモロジー（etymo-logy）とは、「本当の」etymos と「言葉」logos とで出来ている。近代語、あるいはカタカナ語の奥にある、言葉の「本来の成り立ち」を理解することは、それ自体として純粋に心楽しい知的作業ではないだろうか。「ひとは生まれながらに知ることを欲する」とは、哲学者アリストテレスの言である。「学ぶ＝気づくことは、誰にとっても、本来的に心地よいものである」とも。逆に、「知らないのに知ったかぶることこそ、知に携わる者がいちばんやっつけはけないことだ」と、それこそ自らの命を賭して、ソクラテスは戒めた。そういえば

「哲学」というどこかいかめしい言葉も、もとのフィロソフィー (philo-sophy) に引き戻すなら、philo-「愛」と sophia「知」とからなる、もっとシンプルな語感を帯びていた。人間の条件、あるいは市民社会のあり方を、手垢のついた他人の言葉の受け売りではなく、自分の頭で一から考えてみようと思うなら、古典ギリシア語の習得は、おそらく無二の武器となるであろうし、またその入口を覗いておくだけでも、長い人生を過ごすうえで頼りとなる、ひとつの物差しの役目を果たすに違いない。

\* \* \* \* \*

とはいうものの、英語の 'It's Greek to me !'、つまり、「それは私にとってギリシア語だ」という表現が端的に示すように、この言語はおよそ難解なものの代名詞にさえなっているし、たやすく習得できるようなものでないこともまた、事実である。

数学などで目にする「ギリシア文字」に、あるいは敷居の高さを感じるかもしれない。同じ古代語でも、ラテン語を表記するための「ローマ字」が、ある意味では世界で最もアプローチのしやすい文字であるのと、これはたしかに異なる点である。ただ、もともとローマ字はギリシア文字の体系を移入したものであるから、基本的な仕組みはまったく変わらない。何より、アルファベット (alphabet) という言い方そのものが、ギリシア文字の最初の二つ (alpha-beta) を並べただけの、じつは安易な名称なのである。

辞書や参考書など、学習の環境という点でも、近代諸語のように至れり尽くせりの道具に恵まれているわけではないが、他方で、現存するほぼすべての古典ギリシア語文献はすでにデータ化されており、たとえば Perseus というサイトでそれらにアプローチすることができる。ある程度以上の学習者になると、一世紀以上前に作られたオクスフォードの「ギリシア語-英語」辞書を用いるのが通例となっているが (*Oxford Greek-English Lexicon*; これには「大」、「中」、「小」とあって、学習者には「中」の <intermediate> がお奨めである)、大英帝国の時代に編まれたこの記念碑的な大辞典はすでに著作権が切れているから、これもまた、最近ではインターネット上や、あるいは iPhone / iPad のアプリなどで、無料で出回っているものを利用できる (ちなみに phone はギリシア語で「音声」、tele は「遠い」、そこから tele-phone という造語が生まれる。つまり、iPhone はもちろん、スマホの「ホ」も、じつはギリシア語に由来するということになる)。なお、ある程度の語形変化に慣れることなくしては、そもそも字引に載っている形にたどり着くことができないので、初等文法を学習するうちは辞書を用意するには及ばず、まずは教科書の終わりに付されている語彙表の範囲内で、基本的な仕組みを学ぶことになる。こちら世に出てすでに半世紀ほど経っている、田中美知太郎・松平千秋『ギリシア語入門』(岩波書店)、まずはこの一冊だけ用意してもらえればよい。

古代語ならではの学習上のメリット(?) というのもまたあって、そのひとつに、ネイティブの不在、という点が挙げられる。相手はもう二千年以上も前にこの世を去った人間ばかりなので、やれ発音が悪いだとか、やれ文法にこだわらずにもっと生きた語法を学ぶべきだ、などと叱られる心配がない。日本人だろうと西洋人だろうと、この言語に関するかぎり、文法にしがみついて学習する以外に道はないのである(そもそも英語でいう grammar school とは、あくまで古典語の文法を学ぶための学校を意味した)。ところで、この「文法」(grammar) であるが、これがじつによくできていて、動詞であれば「人称と数」、名詞であれば「性・数・格」といった具合に、あらゆる文章が「分析」(analysis) に耐える仕組みになっている。したがって誰であれ、こつこつと学習すればその分だけ確実に知見がひらけていくわけで、授業に出れば、その回ごとの手応え、ないしは達成感というものが約束される一はずである。が、じっさいのところ、教科書を手に入れば、おびただしい活用表のオンパレードに、せっかくの学習意欲もげんがりしてしまうかもしれない。こんな表を、最初から覚えることは誰にだってできないし、またそのような理不尽なことをやろうとする必要もない。完璧主義の傾向がある人ほど、くれぐれも「車輪の下」にならないよう、気をつけてほしい。大事なものは、これらの「活用表」(paradigm) のそれぞれが何を意味するかであって、それこそがパラダイム、つまりは「認識の枠組み」そのものを提供してくれるのである。これらをひとつずつ着実に消化していくほかに、学習の近道というものはない。けれども、二千年も前にこの地上に生きていた人々、しかも民主制や裁判員制度に象徴される、「市民社会」というじつに実験的な共同体のあり方を追求した人々の残した言語が、少しずつ分かるようになっていく、その喜びは、もはや何にも代えがたいはずである。

以上。